

学習意欲とその阻害条件の研究

—個人特性と状況要因の相互作用モデルに基づく脱モチベーションと対処行動の分析—

A Study of Learning Motivation and Obstruction Conditions:

An Analysis of Negative Motivation and Coping Behavior on the Basis of
an Interaction Model with Personal Traits and Situational Factors

杉山 憲司

Kenji SUGIYAMA

I. はじめに

現代の中学、高校、大学生の一部に「無気力」、「無関心」、「シラケ」、「指示待ち」など、広い意味でスチューデント・アパシー (student apathy) と称される、いわばネガティブ・モチベーションないし脱モチベーション (a- motivation) ともいうべき現象が指摘されて久しい。このような現象は、例えば、夜間大学院に通学されている現職の教員院生方から、「学習に限って無関心で意欲がないが、その他の場面では適応的な生徒」とか、「競争場面で、競争を回避し、チャレンジしようとしないう生徒」などと語られることが多かった。⁽¹⁾ このような生徒達の動機状態を、元々コンピテントであった幼児や児童が、日常生活や学習などの何らかの体験を通して動機づけが低下したか、ないしは、動因や誘因などの動機づけが機能しなくなった状態と考えて、ここでは仮に、脱モチベーション (a- motivation) と表現する。

このような脱モチベーションを説明する理論としては、①動物実験を基に、行動と結果の間に随伴性が伴わない経験を重ねることによって、自発的行動や動機づけが低下するばかりでなく、認知・情動面の障害を引き起こし、やがて行動全般に般化すると主張したセリグマンの学習性無力感理論 (Seligman & Maier, 1967) や、その改訂理論 (Abramson, 1988) がある。セリグマンは学習性無力感理論を人間のうつ病の動物実験モデルと位置づけ、行動科学的な抑うつ研究の先鞭を付け

(1) 以前担当していた大学院文学研究科教育学専攻の授業「学習心理学特講」受講生からの情報による。

た。その後、認知的な再解釈を経て、今日の認知行動療法ない客観的な証拠に基づいた臨床心理学 (evidence based clinical psychology) の研究を促したといえよう。また、②臨床場面で、治療効果が長続きする人としらない人がいることや、成功を経験しているにもかかわらず期待が増大しない人の存在から、ロッターは人格変数としての内的-外的統制概念を提唱した(Rotter, 1966)。ここでは、「強化は、運や偶然、運命の結果であるとか、力を持った他者の統制下にあるとか、まわりの状況が複雑すぎて予測できない」という外的統制感と脱モチベーションとの関連が指摘できる。統制の位置 (locus of control) やセルフ・モニタリング (Snyder, 1986/ 1998) のような人格変数は、①状況の解釈を通じて、自分を正当化できる状況を選択し、②自分の行動の理由を、個人的な特性から、状況の圧力へと効果的に転移するなど、③媒介変数としての機能を持ち、且つ、測定尺度を開発しているという共通性があるが、特に、④その人がなぜそのような状況にいるのか、そのような状況を作るのにどんな役割を果たしたのかなど、認知的人格変数の場面選択機能が重要と考えている。この他にも、脱モチベーションに関わる理論としては、アトキンソンの達成動機づけモデルの中の失敗回避動機に相当するテスト不安 (Tobias, 1985) なども考慮する必要がある。

これらの諸理論はいずれも、学習への前向きな取り組みを前提としており、その結果、行動と結果の随伴性認知が体験できないことから動機づけが低下する、ないしは、学習・テスト場面で過度に緊張した結果、普段通りの遂行すら達成できなかった、と言うのがその説明原理である。しかし、上記の教員院生が体験しているネガティブな状態にある生徒は、そのような理解とは少し違って、あえて言うならば、①豊かさを背景として、不安やストレスを避けることを第一義とした生き方、チャレンジではなく癒しを求める生き方が根本にあると考えるか、或いは、②元々の脱モチベーション状態から、既に、変質していて、生徒や学生には、教師側が感じている、現状に対する危機感や緊張感とは無縁な状態にあると思われた。

このような広がりのある現象を随伴性認知の欠如を説明原理とする学習性無力感のみで理解しようとするのは無理ではないだろうか。21世紀を迎えた今日、癒しを求める心性が蔓延し、これまでの学校文化とは異質な臨床心理士やスクールカウンセラーの配属が進む状況にあって、「癒し」が必要なのか、「ストレス耐性」の弱体化が問題なのかは、理論的には正反対の対処法が想定され、且つ、個人差も大きいであろう。その意味で、現時点で問題点を再度整理しておく必要があると思われる。その為には、前提となる、青少年のネガティブ・モチベーションの実態をあるがままに分析・把握しておく必要があると考え、少し古いデータではあるが改めて分析し直し、整理しておくことにした。そこで、本研究の目的は、(1) 学習性無力感とは異なる脱モチベーションの存在と実態を明らかにすること。(2) 脱モチベーションに関連する個人特性と状況要因を分析して、対処行動の手がかりを得ることである。

II. 研究1（学習性無力感とは異なる脱モチベーションの予備的分析）⁽²⁾

1. 研究1の目的

- 1) 学習性無力感理論に基づかない、ネガティブな学習動機（脱モチベーション）の存在と実態を明らかにする。
- 2) 何時、いかなる理由で脱モチベーションが生じ、変容するのかについての手がかりを得る。
- 3) 脱モチベーション、ないし、ネガティブな学習動機と自己概念や気質・性格との関連を分析し、脱モチベーションの性質を明らかにする。

2. 研究方法

2-1) 自由記述による脱モチベーション予備調査

予備調査は自由記述の方法で行った。調査の内容は、「無関心」についてお聞きします。1-1. 「無関心」とは、どういう状態の言葉だと思いますか。具体的に書いて下さい。1-2. 「無関心」の状態になるのは、どんな時、何がきっかけだと考えられますか。1-3. 「無関心」に初めてなるとしたら、いつ頃（例えば、小学校低学年など）だと思いますか。1-3-SQ. その頃初めて、「無関心」という状態になるのはなぜだと思いますか。1-4. 「無関心」になることの良い面がありますか。あったら、具体的に書いて下さい。」というものである。以下、無関心の所に、「指示待ち」、「シラケ」、「無気力」の4語を入れ替えて、順次、質問した。調査の順番は、最初聞いた言葉に多くの答えが出て、後から聞く言葉には回答が減ることを考慮して、調査グループを4等分して順序を入れ替えた4種類の調査票を使用した。最後に、「上記の4つの言葉以外に、似たような意味の言葉があったら書いて下さい」の質問を加え、FSとして、学科、学年、性別を書いて頂き、無記名とした。

2-2) 「人間の意欲とその阻害条件」予備調査

上記の「脱モチベーション」の自由記述の結果と、シンポジウム「ネガティブ・モチベーションの問題」（水口禮治, 1996）等を参考に、調査票を作成した。具体的には、調査票の構成は（1）「意欲とその阻害状況」調査は、①積極的な環境的抑制要因の存在（やろうとしても、やれる状況がないか、やらせてくれない）、②効力期待の欠如（学習性無力感：やろうとしても、やれる自信がないか、やれる力がない）、③結果期待の欠如（やってもよいことはない、やってもやらなくても同じ）、④価値観や信念に基づく不行為（私には興味がない、やる必要がない）、⑤否定的感情による不行為（とにかく不愉快だ、係わりたくない）の5要因を仮説とした、各4項目合計20問から成る5段階のリッカート評定尺度を作成した。また、この尺度による脱モチベーション状態の性質を明らか

⁽²⁾ 研究1は1996年度文学部教育学科卒業論文、新家浩美「無気力の形成と子どもの発達（未公刊）」を再分析した。その一部は日本教育心理学会で発表された（杉山, 1997）。

にするため、併存項目として、自尊心と気質の項目を追加した。従って、関連要因として、(2) 自尊心はローゼンバーグの自尊感情尺度10項目(遠藤・井上・蘭, 1992)とパスらの自尊心尺度6項目(Cheek & Buss, 1981)の合計16項目(何れも5段階評定)、(3) 気質はMPIを参考に活動性・外向性・神経症傾向各4項目(3段階評定)の合計12問。以上の構成からなる「人間の意欲とその阻害条件」調査票を新たに作成した。

2-3) 調査対象者

脱モチベーション状態についての予備調査は大学生40名(男子19名、女子21名)、「人間の意欲とその阻害条件」調査は大学生110名(男子39名、女子71名)が対象である。

3. 脱モチベーションの自由記述調査の結果と考察

3-1) 脱モチベーション予備調査結果の概要⁽³⁾

脱モチベーション状態の調査結果は、例えば、「無関心」に対して、「自分には興味がない状態」、「何にも興味が持てない。持たない。」等の国語辞書的な同義反復的な説明が多い。しかし、脱モチベーションの心理的背景や状況を詳しく記述したり、或いは、要因や結果に言及している記述も少なからずある。以下に、そのような記述を中心に、自由記述(以後、FAと略す)の具体例と分類視点を示す。

「無関心」とはどういう状態か

a. 無関心の状況・状態の記述による説明(「何に対しても興味が持てない。興味が持てないから特別な行動もおこさない。特別なことをしないから、ただ日々を生きるために過ごす。そんな状態で生きているという自覚さえない状態。一言で言うと、活気がなくおもしろみのない状態。」、「自分には関係がない、と気にもせず関わろうとしない状態」、「物事を受け入れようとせず、想像力や知識欲にフタをしてしまう状態」など)。b. 感情の記述による説明(「何事にも興味が無い。感情がない。」など)。c. 無関心の原因や結果に強調点を置いた説明(「挫折した時、能力に限界を感じた時、将来が見えた時」など)。d. その他、国語辞書的な説明(「何事にも関心がない状態」など)が認められた。

以上の記述だけでも、脱モチベーションが多様な原因で生じること、脱モチベーションがもたらす消極性ないし否定的行動が社会的にきわめてマイナスであることが推察される。

「どんな時」、「何がきっかけで」無関心になるのか

a. 原因・理由による説明(「挫折した時。能力に限界を感じた時。将来が見えた時」、「極度の心身の疲労や自分に目標や生きがいを見出せない時」、「問題に対して自分が介入しても、解決する見

(3) 脱モチベーション状態調査の自由記述の全文は紙数の関係で省略する。

込みがない時]、「自分が対象に影響を与えても、自分にとって何らの利益も見出せないことに気が付いた時」など)。b. 感情による説明（「嫌いになった時。嫌なことをされた時」など）。c. 社会的状況による説明（「他の状況に合わせるのに疲れ、その行為を放棄した時」、「自己を侵害されたくない時」など）。d. 自己概念・価値観による説明（「関心を持つことが、ダサく思えてしまったり、無関心を装うことがカッコ良いと一般的に思えるようになる時」、「本当に（全てのことに）無関心になる時はないと思う。最低限、自分のことには関心があると思う」など）。e. その他、辞書的説明（「つまらなくなる時だ、絶対」など）などが認められた。

能力の無さのような内的要因、報酬や社会的評価と結びつかないなどの外的要因、さらに否定的感情や社会的比較に基づく自己概念や自己価値に対する懐疑など、多様な原因やきっかけが示されている。動機づけがきわめて個人的現象であると同時に、きわめて社会的な現象であることが指摘されていると言えよう。

「無関心」に初めてなるとしたら、いつ頃からか

a. 幼児期から（「幼児の時から（おもちゃで遊んでいて）」、「3歳位」、「保育園（幼稚園）後半から小学校の前半」など）。b. 小学生から（「小学校に入学した時」、「小学校低学年」など）。c. 中学生から（「中学校1年」、「思春期」など）。d. 高校生以降（「高校生から大学生以降」など）。e. その他（「人によってかなり違うのでは？」など）、が認められた。

以上のように、幼児から高校生に至る非常に大きい多様性が認められた。この発達の違いが、何と関係しているのか分析する必要がある。

その頃初めて「無関心」という状態になるのはなぜか

a. 発達の必然（興味関心の分化）による（「幼い頃は何にでも興味があり、それが一段落するから……」、「ある程度の知識（教養）を得て、『何でも知りたい』という時期を過ぎたから」、「自分が関心のあることと関心のないことが分かるようになるから。」など）。b. 自我や価値観の形成による（「『自分』という性格が分かってきたから」、「自我の芽生えと共に…かな。」、「先（自分の将来）が見えてくるから」、「自分というものの存在について考える時期だから。」、「無関心を装うことで大人っぽく見えるため」、「周囲に対して疑問を持ち始め、自分に関係がないと感じるものが出てくるため。」など）。c. 教育のネガティブな側面の強調（「知識のみの詰め込みで、感情などの情緒面とのバランスを欠いていくから。」、「いじめや校内暴力など、介入すると自分が不利になる可能性がある」など）。d. 他者の存在や比較による（「…、他者や社会との関係の中で、自分を考えられるから。」、「干渉されたくないから」など）。e. その他（「何か面白いことを見つけれられたのもこの時期ですな」など）が認められた。

認知的発達や自我の成長、社会的比較などを通じて、脱モチベーションも生じることを伺わせる内容となっている。発達支援としての教育・学習という視点、特に、自己概念と結びついた原因

帰属のありようが分析の鍵と考えられる。

「無関心」になることの良い面

a. 有害・不要なものが避けられる (「タバコやシンナー、酒などに関心が強くなる中学生にとって、これらのことに無関心でいられる意志があればそれはそれでいいと思う」、「非常識なことに興味を持たなくなった時は、正解」など)。b. 混乱や葛藤の回避 (「ある事件に対して、処理能力がない時は、他の (処理能力の) ある人に任せるという意味で有効?」、「義務が伴わないものならば、責任を取ったり面倒なことに巻き込まれないで楽である」など)。c. 自己防衛・精神的安定 (「自分を防御することができる」、「感情が変化しないため、精神的安定が得られる」、「自己を守る? 傷つかない」、「心の回復に必要な時間」など)。d. 偏見などの否定的な社会的影響からの回避 (「熱くなって『群衆』になることが、少なくなる」、「冷静に物事を受け止められる」など)。e. その他 (「特になし」など)。が認められた。

FAの記述から、一時的にせよ、無関心の効用はあるようだ。しかし、その事実と、無関心が日常化し、自己目的化ないし行動スタイルとして定着してしまい、消極性や場面回避に伴うチャンスの見逃しなど、二次的なマイナスを考慮した理論化が必要であろう。

無関心については以上であるが、「指示待ち」「シラケ」、「無気力」の結果については省略する。

3-2) 「人間の意欲とその阻害条件」調査のFA結果の概要

「人間の意欲とその阻害条件」調査のIII. 「あなたが今までに脱モチベーションやネガティブなモチベーション (無気力、無関心、シラケ (ル)、指示待ちなど) の状態に陥った経験があったら、その時期、思い当たる理由、どのようにして抜け出したか等について自由に書いて下さい。また、脱モチベーション研究についても、意見があったら自由に書いて下さい。」のFAの具体例を以下に示す。

「基本的に好奇心が枯れたことはないのですが、一つのことに夢中になったが為に、他の事への関心が消えて、それが勉強だったりして成績が落ちた時に、無気力になったと先生や親から大騒ぎされたことはあります。(以下略)」、「ちょうど高校2年の夏頃、受験への不安と自分に対する不信感から、一時期、無気力状態に陥ったことがあったが、自分の将来に対して、展望が開けてきて、目標が定まった時には、逆に、やる気が以前以上にわき上がってきた。(以下略)」、「気負いすぎて、少しくましくないかとひどく落ち込む→無気力、『わあ、かったるい。学校サボりたい、バイト嫌だ、行きたくない。フランス語やらなきゃ、でもやりたくない』という状態になる→自分の最高に好きなことを一生懸命やる (中略)→復活、またやる気がでる。これが定期的に起こります。」、「(前略) 受験で第1志望に落ちた時や、今まで自分が努力してきたことが、他人から少しも認められなかった時は、とりわけ落ち込んだという経験がある。それをどうやって抜け出したかは、私の場合は姉妹や母親、友人などの言葉、読んだ本の中の一節、映画などの言葉を励みに新

しい自分の別の考えを作り出し、立ち直ってきたのではないかと思う」、「田舎から上京してきてから、夏休み明けくらいまで、いわゆる「ホームシック」で、その上、自分が想像していた大学生活とは、違う生活（特に、親しい友達がなかなかできず、あいさつだけの友達と話すのにもとても疲れた）にショックを受けて無気力になった。（以下略す）」、「2種類あると思う。1つは、自己の才能の欠如。「自分に見切りを付けた」という意味。悔しさと共に、場合によっては、自分の無能さをいやというほど味わわなければならない。未だに、抜け出したとは言いにくい所もあるが、早いとこ別な何かを探して、それに打ち込むことにより、忘れていくしかないと思う。2つ目は、環境の欠如。「自分に見切りを付けた訳ではないが、その場がなくなった」という意味である。（中略）今現在、この状態なので、何とも言えないが、早い所、その場を見つけること以外、解決しないであろう。ただ、見つからない時期が、ずっと続くと、次第に「やる気」が失せてくる（ある意味でこれも解決の1つとも言える。）」「受験に失敗したと考えた時、時間が解決してくれた。まわりにふと気づくと気の良い友達がいた。精神病の授業を受け、自分を客観的に見ることができた。以上3つで抜け出した気がする。ネガティブを乗り越えると、もっと好きな自分になれる気がする。」、「高三の頃（前略）学祭なのにただただシラケていた。きっとそれは、疎外感を感じたからだと思う。自分が受け入れられないと感じると、人は無気力になり、シラケルのだと思う。勿論、学祭が終わったら、その無気力もシラケもなくなった。」、「約2～3歳（右耳のケガ・親の無責任が理由）、11～13歳（クラス替え・その担任の高圧的態度）、14～15歳（クラブ、恋愛、受験など・挫折感）、16～現在（受験、恋愛など・挫折感）、その時期が過ぎ去ったことによって具体的な事実（原因）はなくなったが、後遺症とも言うべき消極性が残った。」

以上は、被調査者110名中、FAを記述した93人の回答のほんの一部である。しかし、これらの記述から、①大半の大学生は、大学入学以前に無気力感を体験しており、脱モチベーションは日常的現象である。②大学生の脱モチベーションは、高校から大学生活へという環境移行に伴って生じ、新しい友人関係を得て回復しているようだ。③脱モチベーションに至る理由として、受験の失敗や、学業成績など、学校の評価環境と関連した記述が多い。④脱モチベーションは日常的に繰り返される出来事であり、うつ病などの精神病理とは切り離して考えた方がよい（但し、大学の学生相談室などの臨床場面では、両方のクライアントが来る可能性がある）。⑤FAの一部に、複数の要因をあげての説明とか、内的外的要因に分けた上で両要因に言及するなど、明らかに大学の心理学授業を踏まえていると考えられる回答、等が認められた。

3-3) 脱モチベーションの自由記述調査に対する考察とまとめ

以上の自由記述結果から、個々の考察は結果の最後に記したが、全体として、(1) 調査目的の第1に当たる、脱モチベーションに陥る説明（仮説）として、①挫折、能力欠如などによる効力感欠如（学習性無力感）、②将来に対する不安（目標欠如）、③感受性欠如ないし日常的な否定的感情の蔓延、④心身疲労（過労）、⑤強制や外的障害の存在、⑥社会的既成価値に対する懐疑、⑦社会的比較に基づく自己不信・自己価値に対する懐疑などが指摘されていた。(2) 学校の評価環境と脱モ

ティベーションとの関連性については、18歳人口の減少や、大学全員入学などの状況変化の影響を明らかにするためにも、脱モチベーションの定点観測による比較研究が有益なデータをもたらすと推測される。(3) 脱モチベーションに対する対処行動と関連して、世代間伝達や発達支援としての教育視点の重要性が指摘できよう。

4. 「人間の意欲とその阻害条件」調査結果の概要

4-1) 「脱モチベーション」尺度因子分析と関連要因の分析結果

「脱モチベーション」尺度の因子分析結果を表1に示した。主成分分析・4, 5, 6 因子のバリマックス回転を行い、解釈のし易さ、及び、なるべく多様な脱モチベーションの実態を明らかにするという研究目的から、多めの6因子を選び、仮に、表のような因子名をつけた(杉山, 1997)。また、「脱モチベーション」尺度の6因子得点と自尊感情などとの相関係数・有意性検定結果を表2に示す。

表1. 「脱モチベーション」尺度因子分析結果(回転後の成分行列)

番号	質問事項	成分						
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	共通性
因子1 効力感欠如(学習性無力感)								
5	何かやりたいことがあっても、自信がなくて止めたことがある	0.817	-0.070	0.143	-0.035	-0.027	0.019	0.502
6	失敗や批判を恐れて、本当はやりたいことがあっても、自分から行動しようと思わなくなったことがある	0.796	0.037	-0.110	-0.063	0.228	0.074	0.661
7	何かやりたいくても、自分にそれをやる能力がないと思い、やらなかったことがある	0.705	0.125	0.374	0.050	0.050	-0.056	0.504
8	何かやりたいくても、そのことに対する知識がなくてできなかったことがある	0.657	0.076	0.037	0.111	-0.210	0.194	0.459
因子2 競争回避								
11	何かをやっても、やらなくてもいいとしたら、特に自分からは行動しない	-0.011	0.836	0.150	-0.014	0.085	-0.030	0.695
12	何かをやらなくても、叱られ(罰せられ)なければ、進んで行動しない	-0.003	0.807	-0.035	0.039	-0.019	0.156	0.709
20	自分に関係ないことは関わらないことにしている	0.062	0.564	0.364	0.117	-0.108	-0.200	0.661
4	現代は情報化社会だという何をどう行動したらよいか分からない社会だと思う	0.204	0.503	-0.257	0.169	0.262	0.033	0.532
15	他人は別として、自分にとってはやらぬ方がましだと思うことがある	-0.016	0.476	0.197	-0.307	0.339	0.315	0.392
因子3 自己不信による行為中断								
13	自分で何かをやらうとする気持ち(意図)が起ころとも、そんなことは無駄なことだと考えて止めてしまった	0.136	-0.023	0.780	-0.025	0.243	-0.068	0.702
16	何かをしようと思っても、やってもしょうがないと思直して、止めてしまうことがある	0.377	0.286	0.715	-0.014	0.032	0.049	0.730
因子4 外的統制感								
2	受験などで押さえ込まれて、自分のやりたいことをさせてもらえなかったと思う	-0.047	0.064	-0.026	0.807	-0.017	0.045	0.678
3	何かをしようとしても、時間や施設がなかったりして、やれないことが多かった	0.156	-0.119	-0.184	0.610	-0.160	0.185	0.692
1	現代日本の学校制度は管理的で、やりたいことが出来ないことが多いと思う	-0.053	0.175	0.246	0.603	0.155	-0.146	0.495
因子5 既に価値に対する懐疑								
17	一生懸命、まじめにすることは、あなたが価値があるとはいえない	0.038	0.038	0.033	0.121	0.751	-0.020	0.573
14	世の中には、やる必要のない、無駄なことが多いと思う	0.004	0.111	0.265	-0.195	0.609	0.065	0.738
因子6 否定的感情(ネガティブ・ムード)による行為中断								
18	何かきっかけで、何もする気力がなくなったことがある	0.121	0.107	-0.111	-0.010	-0.333	0.681	0.583
10	どんなに自分が頑張っても、何も出来ないまま、何も得るもの(報酬)がないと感じて、止めたことがある	-0.156	0.016	0.563	0.039	0.096	0.591	0.613
19	何かに挫折して、途中で放棄したことがある	0.304	-0.048	-0.024	-0.002	0.178	0.452	0.332
9	自分が好きだったり、うまく出来たことが、周囲の人から評価されなかったと感じたことがある	0.014	0.059	0.011	0.328	0.301	0.436	0.520
因子寄与		2.599	2.337	2.051	1.707	1.588	1.489	11.771
因子寄与率(%)		12.996	11.685	10.254	8.536	7.940	7.445	58.857
(因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法)								

表2. 「脱モチベーション」尺度因子得点と自尊感情(Z得点)などとの相関関係とT検定結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
自尊感情	-0.398**	-0.067	-0.206*	-0.281**	-0.012	-0.146
自尊心	-0.379**	0.068	-0.278**	-0.241*	-0.046	-0.117
活動性	-0.148	-0.159	-0.113	0.072	0.076	0.016
外向性	-0.262**	-0.067	-0.316**	-0.039	0.029	0.012
神経症傾向	0.119	0.006	0.096	0.155	-0.032	0.215*

**p<0.01, *p<0.05

第1因子は表1から、「何かやりたいことがあっても、自信がなくて止めたことがある」、「失敗や批判を恐れて、本当はやりたいことがあっても、自分から行動しようと思わなくなったことがある」、「何かやりたくても、自分にそれをやる能力がないと思い、やらなかったことがある」などの項目に因子負荷が高く、且つ、表2から、自尊心関連の2尺度と有意な負の相関があることから、「効力感欠如（学習性無力感）」因子と解釈した。第2因子は、「何かをやっても、やらなくてもいいとしたら、特に自分からは行動しない」、「何かをやらなくても、叱られ（罰せられ）なければ、進んで行動しない」、「自分に関係ないことには関わらないことにしている」などの項目に因子負荷が高く、表2から、自尊心の低下や気質特性との関わりが認められない所から、不適応感（自尊心の低さ）等との関係が認められない脱モチベーションと解釈され、「競争回避」因子と名づけた。第3因子は、表1から、「自分で何かをやるとうとする気持ちが起こっても、そんなことは無駄なことだと考えて止めてしまったことがある」、「何かをしようと思っても、やってもしようがないと思い直して、止めてしまうことがある」の2項目で因子が構成されており、表2から、第1因子と同じく、自尊心関連2尺度と有意な負の相関、及び、内向性気質との有意な相関（外向性との有意な負の相関）が認められるところから、「自己不信（ないし自己懷疑）による行為中断」因子と解釈した。第4因子は、表1から、「受験々々で押さえ込まれて、自分のやりたいことをさせてもらえなかったと思う」、「何かをしようとしても、時間や施設がなかったりして、やれないことが多かった」、「現代日本の学校制度は管理的で、やりたいことが出来ないことが多いと思う」の項目に因子負荷が高く、且つ、表2から、自尊感情の低下を伴うと推測され、外的な抑制や管理されているとの認知に基づいていると理解し、外的統制にあたりと解釈して、「外的統制感」因子と名づけた。第5因子は、表1から、「一生懸命、まじめにすることは、あながち価値があるとはいえない」、「世の中には、やる必要のない、無駄なことが多いと思う」の項目に因子負荷が高く、表2から、自尊心や気質との関係が認められないので、「既成価値に対する懷疑」因子と名づけた。第6因子は、表1から、「何かがかきかけで、何もする気力がなくなったことがある」、「どんなに自分が頑張っても、何も得るもの（報酬）がないと感じて、止めたことがある」などの項目から構成されており、個人特性の神経症傾向と有意に正の関係がある所から、「否定的感情（ネガティブ・ムード）による行為中断」因子と名づけた。

4-2) 「人間の意欲とその阻害条件」調査結果の考察とまとめ

研究目的1と関係する、学習性無力感理論に基づかない、多様なガティブな学習動機の存在については、因子2「競争回避」と因子5「既成価値に対する懷疑」の2因子として確認された。特に、因子2の存在は不適応感（自尊心の低さ）が伴わない、いわゆる学習性無力感とは異なる、脱モチベーションであり、自分からは進んで行動しない、関わらない現代の青少年の心性を反映していると思われる。「既成価値に対する懷疑」と名付けられた因子5も同様に、自尊心や気質との関係が認められず、まじめさに価値を置かず、既成価値を無駄だとする態度は、青少年のまじめさの崩壊

が指摘されることと通じるものがある。この因子2と因子5の存在によって、いわゆる学習性無力感とは異なる脱モチベーションの存在が確認されたといえよう。このように、現代の脱モチベーションは自尊心の低下を伴わないか、低下を避けるために、そのような状況を回避する事が特徴と言えるかも知れない。しかしそれが、学習性無力感の深化を意味するのか否かについては今後の検討が必要であろう。

研究目的3と関係して、自尊心などの自己観や気質・性格との関連の分析から、(1)新たに浮かび上がった脱モチベーションとしての因子6「否定的感情(ネガティブ・ムード)による行為中断」は、気質特性の一つである神経症傾向が脱モチベーションと結びつく可能性を示唆したといえる。しかし気質は、今日、パーソナリティの初期値と位置づけられ、変化するものと捉えられているが、このようなネガティブ・ムードに起因する脱モチベーションが、現代の社会的文脈とどのように関連し、消長過程を示すか注視する必要があるであろう。(2)自尊心や自尊感情については、学習性無力感か否かの判断に利用したが、結果として、伝統的な脱モチベーションとしての因子1「効力感欠如」は、気質特性の内向性と関連し(外向性と負の相関があり)たが、因子4「外的統制感」は、認知の問題であり、気質特性との関係は認められなかったことは、妥当な結果であろうが、特に、効力感欠如が内向性と関連することによって、行動的に消極的となり、チャンスを逃すなどの行動特性として機能すると予測される。(3)因子3「自己不信(自己懷疑)による行為中断」は、自尊感情の低下と関連し、気質特性とは関連していなかった。この結果は、自己認知に基づく脱モチベーションの行動特性が行為中断という形を取ることを示唆している。以上の結果から、予備調査の目的である多様な脱モチベーションの存在が認められたと言える。

5. 研究1(学習性無力感とは異なる脱モチベーションの予備的分析)のまとめ

目的(1)の学習性無力感理論に基づかない、ネガティブな学習動機(脱モチベーション)の存在と実態を明らかにすることは、因子2「競争回避」と因子5「既成価値に対する懷疑」として認められ、現代の若者の心性との関連で考察された。目的(2)の何時、いかなる理由で脱モチベーションが生じ、変容するのかについての手がかりを得ることは、自由記述調査から、幼児から高校生に至る大きな個人差ないし多様性が認められた。しかし、その理由や要因との関連の分析は今後の課題として残されている。目的(3)の脱モチベーションと自尊心や気質・性格との関連性の分析から、気質特性、自己概念や自己認知の在り方が脱モチベーションと関係することが示された。

III. 研究2（「脱モチベーション（改訂版）」尺度と関連要因の発達の分析）⁽⁴⁾

1. 研究2の目的

本研究の目的は、(1) 脱モチベーションの内的構造と尺度特性の分析、(2) 脱モチベーションの発達の变化の分析、(3) 脱モチベーションと個人特性・状況要因との関連性の分析、(4) 脱モチベーションの対処行動の手がかりを得ること、の4つである。

2. 研究方法

2-1) 「脱モチベーション（改訂版）」調査票の構成

(1) 脱モチベーション尺度は、予備調査の結果を受けて、①効力感の欠如（学習性無力感）、②競争回避（自発性欠如）、③目標欠如、④環境的抑制因の存在、⑤否定的感情（ネガティブ・ムード）を枠組みとして、各5問、合計25問よりなる「脱モチベーション（改訂版）」尺度を新たに作成した。関連要因としては、個人特性として、(2) ローゼンバーグの自尊心尺度10問（遠藤・井上・蘭 1992）。(3) バスらの自尊心尺度6問（Cheek & Buss, 1981, バス 1986/1991）。③気質特性としてMPIおよびEPI（岸本 1987）を参考に12問。(4) 原因帰属尺度として、セリグマンの楽観度尺度の縮約版24問（Seligman, 1990/1991）を使用した。さらに、状況要因を捉える試みとして、(5) 自分と社会との関わりに関する出来事の体験について、ハーマンズ（Hermans, 1986 堀毛 1996）を参考にして、現在・過去・未来の経験や関心事、その体験に伴う感情の質、共有体験者の存在などを問う10問よりなる「人や社会との関わり体験」尺度を新たに作成した。質問項目は、例えば、「1. 私の人生にとって重要で、今でも大事な役割を演じている過去の出来事がある」、「5. 私が、いつも、よく考え・関心を持っている事柄がある。5-SQ.（それは何ですか　）」という項目である。(6) 人と環境との関わり方について、ヘッテマとケンリック（Hetteema & Kenrick, 1992）の6タイプの分類に基づいて、6問よりなる「人と環境との関係性視点」尺度を新たに作成した。質問項目は、例えば、「1. 自分の適性と学校の特徴とが合致すればよい効果もたらされるが、合致しなければ効果は生じない（タイプ1）」、「5. 自分が学校を選び、通っている学校に影響されて、自分も変化する（タイプ5）」という項目である。

以上の調査票は、A、B記述文の選択式であるセリグマンの楽観度尺度を除いて、後の分析を考慮して、5（非常にあてはまる）、4（ややあてはまる）、3（どちらともいえない）、2（ややあてはまらない）、1（全くあてはまらない）の5段階選択式のリックカート尺度とした。これに、具体例や判断理由を問うFAが、「脱モチベーション」尺度に3問、「自分と社会との関わり体験」に3問加わ

(4) 本研究は1997年度東洋大学特別研究「人間の意欲とその阻害条件の分析」を得て行った研究の一部であり、その一部は日本教育心理学会で発表された（杉山, 1998）。

る。これにFSとして、学部、学年、性別を聞き、合計103問で構成された。

2-2) 調査対象者

中学生148名 (男子75名、女子71名、NA 2名)、高校生333名 (男子165名、女子165名、NA 3名)、大学生148名 (男子56名、女子91名、NA 1名) の合計629名である。

3. 「脱モチベーション (改訂版)」の結果と考察

3-1) 「脱モチベーション (改訂版)」尺度の因子分析結果と考察

脱モチベーション25問は、予備的分析の結果 (杉山 1998) 項目18と23の相関係数が.553と飛び抜けて高く、この2項目のみで1つの因子を構成してしまうので、項目23を除外して分析した。各種の探索的因子分析を行った結果、固有値寄与率、固有値の折れ線グラフ (スクリープロット)、因子の解釈し易さ、及び仮説を考慮して、5因子を選んだ。また、項目内容からして因子間相関が高いことが考えられたので、斜交回転を選んだ。その結果、主成分分析、5因子プロマックス回転後の因子負荷パターン行列を表3に、因子間相関行列を表4に示した。

表3. 「脱モチベーション (改訂版)」因子分析結果 (斜交回転後のパターン行列)

番号	質問事項	成分					共通性
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
因子1 ネガティブムードによる行為中断・放棄							
Q2_08	目的を見失って、一生懸命やっていたことを中断したことがある	0.843	0.025	-0.008	-0.177	-0.112	0.467
Q2_25	何かに挫折して、途中で放棄したことがある	0.661	0.040	-0.010	-0.012	-0.089	0.530
Q2_05	何かがかきかけで、何もする気力がなくなったことがある	0.608	-0.079	-0.078	0.068	0.361	0.469
Q2_10	どちらかというの不快な気分から、落ち込んで、行為中断することがある	0.563	-0.141	0.149	0.246	-0.099	0.407
Q2_06	自分にはやれる力がないと思ひこみ、やる気を無くしたことがある	0.542	-0.053	-0.130	0.324	0.014	0.560
Q2_07	他人は別として、自分にとってはやらない方がましだと思うことがある	0.349	0.233	-0.229	0.262	0.316	0.455
Q2_20	自分が好きだったり、うまく出来たことが、周囲の人から評価されなかったと感じたことがある	0.308	-0.114	0.156	0.176	0.175	0.528
因子2 消極性から来る競争回避							
Q2_02	何かをやっても、やらなくてもいいとしたら、特に自分からは行動しない	-0.146	0.714	-0.014	0.186	-0.070	0.625
Q2_12	何かをやらなくても、叱られ (罰せられ) なければ、進んで行動しない	0.004	0.658	0.135	0.007	-0.131	0.380
Q2_22	自分に関係ないことは関わらないことにしている	-0.145	0.649	-0.080	-0.127	0.306	0.489
Q2_13	何かをしようと思っても、やってもしようがないと思ひ直して、止めてしまうことがある	0.056	0.619	0.004	0.217	0.063	0.472
Q2_03	何かをやるうとするが、そんなことは無駄なことだと考えて、止めたことがある	-0.025	0.514	-0.087	0.362	0.061	0.496
Q2_15	どんなに自分が頑張っても、何も得る報酬がないと感じて、止めたことがある	0.285	0.485	0.080	-0.067	-0.226	0.552
因子3 外的統制信念							
Q2_16	何かやりたくても、そのことに対する知識がなくてできなかったことがある	-0.254	-0.058	0.687	0.250	0.126	0.505
Q2_04	受験で押さえ込まれて、自分のやりたいことをさせてもらえない (なかった)	0.065	0.246	0.511	-0.261	0.092	0.449
Q2_19	手続きや制約条件が多くて、出来ることも、やるのをあきらめたことがある	0.120	-0.007	0.495	0.145	0.148	0.482
Q2_17	現代は情報化社会だというのが何をどう行動したらよいか分からない社会だと思う	-0.037	0.027	0.487	0.211	-0.091	0.303
Q2_09	横ならびの平等が重視されて、新しい試みが受け入れられず、するのをあきらめたことがある	0.306	-0.077	0.451	-0.014	0.047	0.440
因子4 失敗回避から来る不行為							
Q2_01	何かやりたいことがあっても、自信がなくて止めたことがある	-0.016	0.116	0.024	0.630	-0.049	0.398
Q2_21	やりたくても、自分にそれをやる能力がないと思ひ、やらなかったことがある	0.012	-0.074	0.355	0.552	0.048	0.263
Q2_11	失敗や批判を恐れて、本当はやりたいことがあっても、自分から行動しようと思わなくなったことがある	0.159	0.116	0.175	0.505	-0.052	0.482
因子5 外的障害の存在							
Q2_14	何かをしようとしても、時間や施設がなかったりして、やれないことが多い	-0.104	0.017	0.226	0.266	0.595	0.444
Q2_18	自分が何をやりたいかわからず、興味を持って集中できるものがない	0.092	0.152	0.114	0.366	-0.510	0.468
Q2_24	現代日本の学校制度は管理的で、やりたいことが出来ないことが多いと思う	0.123	0.073	0.356	-0.357	0.485	0.433
因子寄与		4.156	3.395	2.721	3.130	1.585	14.987
因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法							

表4. 「脱モチベーション（改訂版）」因子間相関係数

成分	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	1				
因子2	0.381	1			
因子3	0.379	0.201	1		
因子4	0.361	0.254	0.149	1	
因子5	0.197	0.066	0.039	0.150	1

因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表3から、第1因子は「目的を見失って、一生懸命やっていたことを中断したことがある」、「何かに挫折して、途中で放棄したことがある」、「何かがかきかけで、何もする気力がなくなったことがある」などの項目に因子負荷が高く、項目内容に中断、放棄、やる気をなくしたなどが含まれ、且つ、中断・放棄の理由として、目的を見失う、挫折、不快な気分などの否定的理由が含まれているので、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」因子 ($\alpha=.749$) と解釈した。第2因子は、「何かをやっても、やらなくてもいいとしたら、特に自分からは行動しない」、「何かをやらなくても、叱られ（罰せられ）なければ、進んで行動しない」、「自分に関係ないことには関わらないことにしている」などの項目に因子負荷が高く、できるだけ自分からは行動しない、関わらないという消極性から来る不行為と考えて、「消極性から来る競争回避」因子 ($\alpha=.728$) と解釈した。第3因子は、「何かやりたくても、そのことに対する知識がなくて、できなかったことがある」、「受験で押さえ込まれて、自分のやりたいことをさせてもらえない（なかった）」、「手続きや制約条件が多くて、出来ることでも、やるのをあきらめたことがある」などの項目に因子負荷が高く、外的環境の抑制の存在に加えて、行為者の外的環境の認知特性と考えて「外的統制感」因子 ($\alpha=.548$) と名づけた。第4因子は、「何かやりたいことがあっても、自信がなくて止めたことがある」、「やりたくても、自分にそれをやる能力がないと思い、やらなかったことがある」、「失敗や批判を恐れて、本当はやりたいことがあっても、自分から行動しようと思わなくなったことがある」の3項目で構成されており、何れも、自信や能力の欠如、失敗の恐れについて言及しており、後述するように、自尊心の低下と関係しないところから、いわゆる達成動機の構成要素としての失敗回避動機と解釈して、「失敗回避から来る不行為」因子 ($\alpha=.612$) と名づけた。第5因子は、「何かをしようとしても、時間や施設がなかったりして、やれないことが多い」、「自分が何をやりたいのかわからず、興味を持って集中できるものがない」、「現代日本の学校制度は管理的で、やりたいことが出来ないことが多いと思う」の3項目で構成されており、何れも、興味・集中できるものはあるが（項目18はマイナスの因子負荷）、外的社会的な障害が行動を抑制していると解釈して、「外的障害の存在」因子 ($\alpha=.108$) と名づけた。なお、この因子は α 係数がきわめて低く、以後の分析では参考に止める。

以上の解釈は、因子1「ネガティブムードによる行為中断・放棄」、因子2「消極性から来る競争回避」、因子3「外的統制感」、因子4「失敗回避から来る不行為」の4因子間に比較的高い因子間相関があり、因子5「外的障害の存在因子」のみは、他の因子との相関係数が低い。これは第5因子のみが純粋な外的要因による脱モチベーションと考えれば説明が付くと考えられる。

3-2) 「脱モチベーション (改訂版)」 5 因子の発達の比較と考察

脱モチベーションの発達の比較のために、因子を構成する質問項目の素点による各因子の平均値と差の検定結果を表5に示した。

表5. 「脱モチベーション (改訂版)」 5 因子 (素点) の中学・高校・大学間T検定

	中学生		高校生		大学生		有意差検定結果		
	平均 (標準偏差)		平均 (標準偏差)		平均 (標準偏差)		中高	高大	中大
因子1 (ネガティブムードによる行為中断・放棄)	2.933	0.785	3.370	0.644	3.177	0.769	<**	>**	<**
因子2 (消極性から来る競争回避)	2.769	0.727	2.957	0.675	2.641	0.647	<**	>**	
因子3 (外的統制信念)	2.831	0.721	2.996	0.649	2.878	0.689	<*	>(*)	
因子4 (失敗回避から来る不行為)	2.993	0.923	3.308	0.806	3.113	0.896	<**	>*	
因子5 (外的障害の存在)	2.748	0.754	3.102	0.744	3.081	0.707	<**		<**

**p<0.01, *p<0.05, (*)p<0.10

表から、①発達の比較すると、全ての因子で、高校生が最も脱モチベーションが強いようだ(統計的には、因子1、因子2、因子4で、高校生は中学・大学生と比較して、有意に脱モチベーションが強かった)。②因子1「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は中学生で最も弱く、高校生で強くなり、大学生で再び弱まるようだ。③因子2「消極性から来る競争回避」は中学生から高校生にかけて強まり、大学生で再び弱まるようだ。④因子3「外的統制信念」は中学生で最も弱く、高校・大学で強まるようだ。⑤因子4「失敗回避から来る不行為」は中学生で弱く、高校生で強くなり、大学生で再び弱まるようだ。⑥因子5「外的障害の存在」は中学生で最も弱く、高校生で強くなり、大学生で再び弱まるようだ。

以上の結果は、(1) 脱モチベーションが、中学生から高校生に掛けて発達の強まるか、高校生という状況ないし、高校の学校環境なり評価環境が学習動機を低下させる状況があるのかも知れない。(2) 「外的障害の存在」のみは、中学よりも、高校・大学で同等に強く、「外的障害の存在」による脱モチベーションが、大学生を含めて発達の増加する傾向が示された。この点に関しては、今後の検討が必要であろう。

3-3) 「脱モチベーション (改訂版)」 尺度と個人特性・状況要因の重回帰分析結果と考察

3-3-1) 個人特性の分析

ローゼンバーグの自尊心尺度10問、バスらの自尊心尺度6問、気質特性12問、セリグマンの楽観度尺度短縮版24問を集計分析した(分析結果は紙数の関係で省略する)。その上で、重回帰分析における抑圧を避けるために、「脱モチベーション (改訂版)」 尺度の5つの因子得点との相関係数に基づいて、相関が高い類似尺度は独立変数から除外することにした。その結果、自尊心はBussの自尊心尺度、性格特性は活動性・外向性・神経症傾向の3特性、出来事の説明スタイルはセリグマンの分析法に基づく楽観度の5変数のZ得点を個人特性の独立変数として選んだ。

3-3-2) 状況要因の分析

「人や社会との関わり体験」尺度10項目、「人と環境との関係性視点」尺度6項目は、各々、因子分析した。その結果、「人や社会との関わり体験」尺度は3因子を得た（主成分分析・3因子・プロマックス回転、分析結果は紙数の関係で省略する）。因子1は、例えば、「私が現在体験していることで、現在の自分に影響している重要な出来事がある」という項目に因子負荷が高く「体験・関心事」因子、因子2は、例えば、「私は現在、日頃、自分と同じだと共感できるタイプあるいはグループがいる」という項目に因子負荷が高く「共感対象」因子、因子3は、「私は現在、日頃、敵と思えるような感情を持つ人がある」という項目に因子負荷が高く「敵対感情」因子と解釈した。「人と環境との関係性視点」尺度は2因子を得た（主成分分析・2因子・プロマックス回転、分析結果は紙数の関係で省略する）。因子1は、例えば、「6. 自分の特徴が学校や社会に合うように変化するとともに、学校や社会も、そこで生活する人々の要求や特徴に合うように変化するものだ」という項目に因子負荷が高く、人と状況の「相互影響視点」因子と解釈した。因子2は、例えば、「自分の才能に合うような場面には積極的に参加するが、合わない場面は避ける」という項目に因子負荷が高く、環境ないし人の側が一方向的に選択する（される）との見方であり、「単方向視点」因子と解釈した。以上の5つの因子得点を状況要因の独立変数として選択した。

3-3-3) 因子1「ネガティブムードによる行為中断・放棄」と関連要因の発達の分析結果と考察

因子1「ネガティブムードによる行為中断・放棄」を従属変数、上記の5つの個人特性と5つの状況要因を独立変数とする、重回帰分析の結果を表6に示した。

表6. 因子1（ネガティブムードによる行為中断・放棄）重回帰分析の結果

		中学生 (N=148)		高校生 (N=333)		大学生 (N=148)	
独立変数		標準偏回帰係数	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)
個人特性	活動性	0.096	0.170	0.079	0.114	-0.064	-0.000
	外向性	0.045	-0.046	-0.031	-0.033	-0.068	-0.227
	神経症傾向	0.103	0.367	0.185**	0.278	0.258**	0.517
	Buss自尊心	-0.212*	-0.399	-0.197**	-0.239	-0.143	-0.377
	楽観度	0.023	-0.019	0.118*	0.085	-0.099	-0.083
状況要因 (環境との 関わりや認知)	体験・関心事	0.294**	0.359	0.035	0.009	0.074	-0.073
	共感対象	-0.338**	-0.352	0.042	-0.006	-0.090	-0.140
	敵対感情	0.131	0.403	-0.006	0.118	0.125	0.338
	相互影響視点	0.052	0.136	0.035	0.031	0.010	-0.065
	単方向視点	-0.004	0.238	0.119	0.215	0.350**	0.468
ダミー変数	性別	0.193*	0.325	-0.123*	-0.128	-0.072	-0.206
	重相関係数 (R)	0.695**		0.401**		0.663**	

**p<0.01、*p<0.05

表6から、大学生を対象とした研究1では、いわゆる学習性無力感か否かの基準として、自尊心の低下を基準としたが、中学・高校・大学生を対象とした本調査では、この基準は単純にはあてはまらないようだ。①中学・高校生では、有意に自尊心の低下が認められたが、大学生では、研究1と同様に、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は、有意な自尊心の低下は伴わなかった。②「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は、個人特性については、中学から高校生にかけて、発達の神経症傾向との結びつきが強まるようだが、状況要因との一貫した発達の関連性は認められなかった。③中学生では、女子に「ネガティブムードによる行為中断・放棄」が有意に多く、「体験・関心事」有りと「共感対象」の少ないことが有意に関連し、「自尊心」の低下を伴っていた。④高校生では、逆に、男子の方が「ネガティブムードによる行為中断・放棄」が強く、関連要因を比較すると、状況要因との有意な関わりは認められず、神経症傾向と自尊心の低下が有意に関係していた。⑤大学生の「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は、状況要因の「単方向視点」と個人特性の「神経症傾向」が有意に関連し、「自尊心」の低下は有意ではなかった。⑥その他として、高校生で「ネガティブムードによる行為中断・放棄」が「楽観度」と有意に関係していた。「楽観度」はよい出来事から悪い出来事を引いた値であり、相対的に良い出来事を永続的普遍的で、個人的出来事と認知する傾向を表している。楽観度が、全ての集計を通じて、楽観的な者が脱モティベーションが強いという、逆方向に有意な関係はここだけであり、理由は不明である。しかし、神経症傾向や自尊心の低下に対するカウンターバランスとして、一時的・表面的に楽観的な見方が顕れているのかも知れないと推測した。また、中学生の「ネガティブムードによる行為中断・放棄」と有意に関係した「体験・関心事」の内容については、5-SQ. (それは何ですか) で、体験の内容について質問しているが、SQの回答は、例えば、「自分の人生や未来や価値、生きる意味について」、「色々」、「自分の価値観を他の人のそれと同じにはしたくないこと」などの回答が含まれ、ネガティブな出来事か否かで分類できなかった。しかし、全体的な集計傾向から、否定的な「体験・関心事」が多いと推察された。

以上を総合すると、発達的に見て、(1) 女子中学生では、ネガティブな「体験・関心事」と「共感対象」の少ない者に「ネガティブムードによる行為中断・放棄」が生じやすく、(2) 男子高校生では、「神経症傾向」の強さが「ネガティブムードによる行為中断・放棄」の素地になる可能性が示唆されたと言えよう。

3-3-4) 因子2「消極性から来る競争回避」と関連要因の発達の分析結果と考察

因子2「消極性から来る競争回避」を従属変数、個人特性と状況要因を独立変数とする、重回帰分析の結果を表7に示した。

表7. 因子2（消極性から来る競争回避）重回帰分析の結果

		中学生 (N=148)		高校生 (N=333)		大学生 (N=148)	
独立変数		標準偏回帰 係数	相関係数 (γ)	標準偏回帰 係数 (β)	相関係数 (γ)	標準偏回帰 係数 (β)	相関係数 (γ)
個人特性	活動性	0.011	-0.029	-0.013	-0.110	-0.004	-0.153
	外向性	-0.443**	-0.447	-0.183*	-0.311	-0.067	-0.322
	神経症傾向	0.028	0.115	0.080	0.117	-0.086	0.234
	Buss自尊心	-0.085	-0.254	-0.133*	-0.311	-0.284**	-0.396
	楽観度	-0.012	0.042	-0.020	-0.061	-0.022	-0.083
状況要因 (環境との 関わりや認知)	体験・関心事	0.194*	0.047	-0.087	-0.225	-0.204*	-0.372
	共感対象	0.040	-0.189	0.066	-0.144	-0.055	-0.255
	敵対感情	0.053	0.228	0.035	0.170	0.084	0.176
	相互影響視点 単方向視点	-0.225* 0.369**	-0.156 0.361	-0.094 0.234**	-0.223 0.294	0.034 0.257**	-0.023 0.308
ダミー変数	性別	-0.116	0.056	-0.234**	-0.302	-0.148	-0.224
重相関係数 (R)		0.634**		0.541**		0.577**	

**p<0.01、*p<0.05

表7から、①因子2「消極性から来る競争回避」は、中・高・大学生を通じて、状況要因の「単方向視点」と有意に関係し、個人特性の「内向性」とは発達的に関係が弱まる傾向（「外向性」とマイナスの回帰係数）があり、反対に、「自尊心」の低下とは発達的に関係が強まるようだ。②中学生では、特に、「相互影響視点」の欠如と「単方向的視点」の強さという「人と環境との関係性視点」に加えて、「内向性」性格が、おそらくネガティブな「体験・関心事」を媒介として、「消極性から来る競争回避」を強めているようだ。③高校生では、男子の方が「消極性から来る競争回避」が強く、「内向性」と「単方向視点」の強さが関連して、「消極性から来る競争回避」を強め、結果として「自尊心」の低下を来していると解釈した。男子に「消極性から来る競争回避」が強いことは高校の評価環境が男子に厳しく作用している可能性もあり、今後の検討が必要であろう。④大学生では、気質特性が関係しないことが特徴であり、状況要因の「単方向視点」と「自尊心」の低下が関係している。これは、恐らく大学入学などのポジティブな「体験・関心事」の多さが、大学生の「消極性から来る競争回避」を弱める理由となっていると推察した。

以上を総合すると、(1)「消極性から来る競争回避」は、状況要因の「人と環境との関係性視点」が関係し、相互影響的視点の獲得の遅れがもたらす、脱モチベーションと考えられる。他方、(2)個人特性との関連は、「内向性」が素因となりうるが、発達的に、その影響力は弱まるようだと推測される。

3-3-5) 因子3「外的統制感」と関連要因の発達の分析結果と考察

因子3「外的統制感」を従属変数、個人特性と状況要因を独立変数とする、重回帰分析の結果を表8に示した。

表8. 因子3 (外的統制感) 重回帰分析の結果

		中学生 (N=148)		高校生 (N=333)		大学生 (N=148)	
独立変数		標準偏回帰係数	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)
個人特性	活動性	0.035	0.126	0.185**	0.202	-0.137	-0.044
	外向性	-0.025	-0.091	-0.035	0.013	0.165	-0.024
	神経症傾向	0.054	0.243	0.040	0.176	0.264*	0.339
	Buss自尊心	0.024	-0.181	-0.194**	-0.212	-0.032	-0.206
	楽観度	0.037	-0.007	0.047	0.030	-0.140	-0.125
状況要因 (環境との 関わりや認知)	体験・関心事	0.258*	0.327	0.106	0.067	0.072	0.047
	共感対象	-0.370**	-0.366	0.009	0.015	-0.068	-0.018
	敵対感情	0.314**	0.427	0.068	0.157	0.160	0.300
	相互影響視点 単方向視点	0.042 -0.050	0.104 0.164	-0.040 0.156*	-0.010 0.240	-0.081 0.252**	-0.123 0.306
ダミー変数	性別	0.128	0.089	-0.004	-0.016	0.144	0.034
重相関係数 (R)		0.606**		0.377**		0.510**	

**p<0.01、*p<0.05

表8から、①「外的統制感」は認知的な理由による脱モチベーションであり、その為に、中学・高校・大学生に共通する気質特性が認められなかったと解釈した。他方、状況要因は中学生と、高校・大学生とでは異なるようだが、発達の傾向としては、「単方向視点」に止まって、「相互影響視点」を獲得できないことが「外的統制感」による脱モチベーションをもたらすと推測される。②中学生では、「敵対感情」の存在と「共感対象」の少なさに加えて、恐らくネガティブな「体験・関心事」の多さが「外的統制感」による脱モチベーションをもたらすと推測される。③高校生では、「活動性」の高さが結果と結びつかず、これに「単方向視点」が関連して、「外的統制感」による脱モチベーションを強めて、結果として「自尊心」の低下をもたらすと推測される。④大学生では、「神経症傾向」が恐らく行動特性として機能し、高校生の「活動性」の高さと同様に結果に繋がらず、「単方向的視点」と併せて、「外的統制感」による脱モチベーションを生じていると解釈される。

以上を総合すると、(1)「外的統制感」は、「消極性から来る競争回避」と同様に、認知的要因に基づく脱モチベーションと言えようが、質問項目からして、「消極性から来る競争回避」は自己に係わる認知傾向であるのに対して、「外的統制感」は環境状況と係わる認知傾向と推察される。従って、(2)「人と環境との関係性視点」が発達の、単方向視点に止まることが脱モチベーションを強めると言えよう。(3)大学生では、特に、「人と環境との関係性視点」が単方向視点に止まることと、神経症傾向とが関連すると考えられ、これは対処行動の手がかりとなろう。

3-3-6) 因子4 「失敗回避から来る不行為」と関連要因の発達の分析結果と考察

因子4 「失敗回避から来る不行為」を従属変数、個人特性と状況要因を独立変数とする、重回帰

分析の結果を表9に示した。

表9. 因子4（失敗回避から来る不行為）重回帰分析の結果

独立変数	中学生 (N=148)		高校生 (N=333)		大学生 (N=148)		
	標準偏回帰係数	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	
個人特性	活動性	0.174	0.166	0.181**	0.125	0.118	-0.009
	外向性	-0.375**	-0.343	-0.186*	-0.119	-0.161	-0.324
	神経症傾向	0.186	0.285	0.289**	0.356	0.328**	0.468
	Buss自尊心	0.128	-0.129	-0.081	-0.231	-0.183	-0.460
	楽観度	0.086	0.046	-0.079	-0.125	-0.123	-0.159
状況要因 (環境との 関わりや認知)	体験・関心事	0.125	0.161	-0.016	-0.048	-0.172*	-0.319
	共感対象	-0.196*	-0.297	0.019	-0.027	0.011	-0.175
	敵対感情	0.085	0.236	-0.053	0.051	-0.033	0.150
	相互影響視点	0.105	0.075	0.037	0.022	0.133	0.099
	単方向視点	0.002	0.185	0.041	0.104	0.034	0.166
ダミー変数	性別	0.198*	0.261	0.094	0.092	-0.051	-0.123
	重相関係数 (R)	0.597**		0.439**		0.618**	

**p<0.01、*p<0.05

表9から、①「失敗回避から来る不行為」は、発達的に「内向性」との結びつきが弱まり、反対に、「神経症傾向」との結びつきが強まる傾向がある。また、一貫して自尊心の低下を伴わず、状況要因との結びつきがないことが特徴である。②中学生では、「失敗回避から来る不行為」は女子に多く生じ、「内向性」気質と「共感対象」の少なさが脱モチベーションを強めていると推測される。③高校生では、「神経症傾向」と「活動性」が高く、且つ、「内向性」という個人特性が「失敗回避から来る不行為」をもたらしているようだ。(4) 大学生では、「神経症傾向」の高さが、恐らく対人行動を抑制する結果、「体験・関心事」の少なさに伴って、「失敗回避から来る不行為」を高めていると推察される。

以上を総合すると、(1)「失敗回避から来る不行為」、即ち、達成動機の失敗回避傾向の強さは、「内向性」や「神経症傾向」という気質特性が素因となると考えられる。しかし、(2) 気質特性が強く関係する脱モチベーションといっても、その内容は発達的に変化しており、中学・高校生では内向的性格に基づく行動抑制を、高校・大学生では神経症的不安傾向をそれぞれ取り除くなり、弱めることが対処行動につながると推測される。

3-3-7) 因子5「外的障害の存在」と関連要因の発達の分析結果と考察

因子5「外的障害の存在」を従属変数、個人特性と状況要因を独立変数とする、重回帰分析の結果を表10に示した。

表10. 因子5 (外的障害の存在) 重回帰分析の結果

独立変数	中学生 (N=148)		高校生 (N=333)		大学生 (N=148)		
	標準偏回帰係数	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)	
個人特性	活動性	0.172	0.160	-0.064	-0.012	0.235*	0.113
	外向性	0.013	0.071	-0.026	0.048	-0.287**	-0.122
	神経症傾向	0.088	0.202	0.035	0.077	-0.094	0.055
Buss自尊心	-0.269*	-0.150	0.003	0.056	-0.109	-0.104	
楽観度	-0.120	-0.110	0.040	0.062	-0.285**	-0.293	
状況要因 (環境との 関わりや認知)	体験・関心事	0.253*	0.165	0.234**	0.254	0.230*	0.148
	共感対象	0.037	-0.035	0.103	0.175	0.145	0.124
	敵対感情	-0.142	0.057	0.152*	0.202	0.147	0.159
相互影響視点 単方向視点	-0.132 0.031	-0.086 0.005	-0.005 -0.030	0.063 0.077	-0.005 -0.032	-0.061 0.004	
ダミー変数	性別	-0.178	-0.052	-0.097	-0.080	-0.057	0.047
重相関係数 (R)	0.391		0.350**		0.473**		

**p<0.01、*p<0.05

因子5「外的障害の存在」因子は α 係数が低く、また、中学生では重相関係数が有意でないので、参考にする。表10から、①「外的障害の存在」は、「体験・関心事」の多さが共通に関係している。この恐らくネガティブな「体験・関心事」の多さが脱モチベーションを生じていると推測される。②高校生では、恐らくネガティブな「体験・関心事」に加え、「敵対感情」の強さが「外的障害の存在」による脱モチベーションをもたらしていると推測される。③大学生になると、「内向性」と「楽観度」の低さが、「活動性」の高さと結びついて、成功経験を遠ざけることとなり、結果として、恐らくネガティブな「体験・関心事」の多さに結びつき、「外的障害の存在」による脱モチベーションを引き起こすと推測される。

以上を総合すると、(1)「外的障害の存在」による脱モチベーションは、恐らくネガティブな「体験・関心事」と関連した経験に基づく脱モチベーションと考えられる。この因子は α 係数がきわめて低いので、参考に止め、細かい分析は差し控える。

3-3-8) 脱モチベーションと関連要因の総合的考察とまとめ

個々の脱モチベーションについての考察は、それぞれの結果の所で述べたが、それらを総合すると、目的(1)脱モチベーションの内的構造と尺度特性の分析と関連して、①大学生を対象とした研究1と異なり、中学・高校・大学生を対象とした本研究では、自尊心の低下はいわゆる学習性無力感か否かの基準とはならなかった。例えば、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は、大学生では有意な低下は認められなかったが、中学・高校生では、有意な自尊心の低下を伴った。同様な傾向は、他の多くの因子に認められた。従って、予備調査の結果は、青年一般ではなく、大学生に限定して考えた方がよいと思われる。目的(2)脱モチベーションの発達の変化と関連して、②脱モチベーションは、中学生から高校生に掛けて一般的に強まり、大学生になると、再び、

弱まる傾向が示された。これは、一般的な心理的発達傾向によるものか、高校生という状況ないし、高校の学習環境ないし評価環境、或いは高校生が置かれている社会的状況に学習動機を低下させる要素があるのかについて、今後検討が必要である。目的（3）脱モチベーションと個人特性・状況要因との関連性から、③「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は、発達の個人特性の神経症傾向との結びつきが強まるが、状況要因との一貫した発達の傾向は認められなかった。更に、性差が認められ、中学生では女子に、高校生では男子に「ネガティブムードによる行為中断・放棄」が多かった。加えて、中学生では「共感対象」の少なさと、高校生では「神経症傾向」と結びついていて、従って、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」は気質特性と関連した脱モチベーションと考えられる。④「消極性から来る競争回避」は、中学・高校・大学生を通じて、状況要因の「単方向視点」と有意に関係し、環境から一方的に影響を受けるという、どちらかという自己と係わる認知に基づいて生ずる脱モチベーションと解釈された。⑤「外的統制感」は認知的な理由による脱モチベーションと考えられ、発達の傾向としては、「単方向視点」に止まって、「相互影響視点」を獲得できないことが「外的統制感」による脱モチベーションを強めるようであり、どちらかという、社会的環境に関する認知の影響が指摘された。⑥「失敗回避から来る不行為」は発達の個人特性の「内向性」との結びつきが弱まり、反対に、「神経症傾向」との結びつきが強まる傾向があった。何れにしても、気質特性に強く影響を受ける脱モチベーションと考察された。また、中学生では性差があり、女性に多く生じる脱モチベーションで、「内向性」と「共感対象」の少なさが関係するようだ。⑦「外的障害の存在」は、恐らくネガティブな「体験・関心事」の多さと結びついた、体験に基づく脱モチベーションと推測されたが、参考に止められた。

VI. 全体的考察とまとめ

研究1から、目的（1）の学習性無力感理論に基づかない、ネガティブな学習動機（脱モチベーション）の存在については、自尊心の低下を伴わない、「競争回避」と「既成価値に対する懐疑」因子によって検証された。これはステイペックが(Stipek, 1988/1990)自分を守ろうとするディック、何もする気のないハナ、安全志向のサリー、十分満足しているサム、不安が高すぎるアミーのモチベーションの低下について逸話的に説明しているが、そのようなさまざまな脱モチベーションの存在がデータによって検証されたと言えよう。目的（2）のいつ、いかなる理由で脱モチベーションが生じ、変容するのかについては、自由記述調査から、始めて無気力になる時期は、幼児から高校生に至る大きな個人差があった。また、無気力になる理由も、認知的発達や社会的比較など多様な理由が示され、発達支援としての教育視点の重要性が指摘された。目的（3）の脱モチベーション、ないし、ネガティブな学習動機と関連要因との関連性から、気質特性や自尊心の在

り方が関係することが示された。

研究2から、目的(1) 脱モチベーションの内的構造と尺度特性の分析と関連して、中学・高校・大学を対象とした本研究では、自尊心の低下はいわゆる学習性無力感の基準とならず、また中学・高校・大学生の発達過程に伴って、因子毎に脱モチベーションと自尊心の関係は変化した。データとしては示さなかったが、被験者全体を一緒にした重回帰分析の結果からは、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」、「消極性から来る競争回避」、「外的統制感」では自尊心の低下が認められ、「失敗回避から来る不行為」、「外的障害の存在」では自尊心の低下は認められなかった。学習動機については、デシとフラスト (Deci & Flaste, 1995/ 1999) が関係性への欲求 (need for relatedness) の役割を強調し、ウエンツェル (Wentzel, 1997) が、学校という場で、学業と社会性の発達は相互に影響を受けながら進行すると主張するように、動機づけのみならず、広く対人社会性との関連を含めて、脱モチベーションを分析する必要がある。

目的(2) 脱モチベーションの発達の变化の分析と関連して、脱モチベーションは、中学生から高校生に掛けて一般的に強まり、大学生になると再び弱まる傾向が示された。その理由を明らかにするために、学校環境と脱モチベーションの定点調査の重要性が主張された。目的(3) 脱モチベーションと個人特性・状況要因との関連性から、①個人特性との一貫した関係が認められた因子として、「ネガティブムードによる行為中断・放棄」と「失敗回避から来る不行為」因子があり、これらは発達の、神経症傾向との結びつきが強まることが示唆された。また、②「ネガティブムードによる行為中断・放棄」と「失敗回避から来る不行為」の因子は、共通して性差が認められ、中学生では女子に多く、高校生では男子で強くなる傾向が認められた。状況要因との一貫した関係が認められた因子として、③「消極性から来る競争回避」と「外的統制感」は、何れも、発達の傾向としては、「単方向視点」に止まって、「相互影響視点」を獲得できないことが脱モチベーションを強めると考えた。④「外的障害の存在」はネガティブな体験に基づいた脱モチベーションと位置づけられたが、 α 係数の低さから、参考に止められた。

以上の結果は、今後、因子の安定性を確かめると共に、関連要因の内、特に今回新たに作成した、「人や社会との関わり体験」尺度と「人と環境との関係性視点」尺度の尺度特性の検討が不可欠である。これらの検討を経て、目的(4) 脱モチベーションの対処行動の確かな手がかりが得られると考えている。

【引用文献】

- ・Abramson, L. 1988 Social cognition and clinical psychology : A synthesis. New York : Guilford Press.
- ・バス、A・H (著) 大淵憲一 (監訳) 1991 「対人行動とパーソナリティ」 北大路書房
- ・Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1981). Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330- 339.
- ・Deci, E. L. & Flaste, R. 1995 Why We do What We do: The dynamics of personal autonomy. G. P. Putnam's Sons, New York 「エドワード・L・デシとリチャード・フラスト (著) 桜井茂男 (監訳) 1999 『人を伸ばすカー内発と自律のすすめー』 新曜社」
- ・遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編)1992 「セルフ・エスティームの心理学」 ナカニシヤ出版
- ・Hermans, H. J. M. (1986) Stability and change in the process of valuation: An idiographic approach. In A. Angleitner, A. Furnham & G. L. Van Heck (Eds.), *Personality psychology in Europe*, Vol. 2. Swets & Zeitlinger
- ・Hettema, J. & Kenrick, D. T. 1992 Models of person-situation interactions. In G. Caprara & G. L. Van Heck (Eds.), *Modern personality psychology: Critical reviews and new directions*. Harvester
- ・堀毛一也 1996 パーソナリティ研究への新たな視座 大淵憲一・堀毛一也 (編) 『パーソナリティと対人行動』 誠信書房 第9章
- ・岸本陽一 1987 「日本版アイゼンク性格検査 (EPI) の信頼性に関する研究」 近畿大学教養学部研究紀要 15, 1-22.
- ・水口禮治1996 「ネガティブ・モチベーションの問題」 日本心理学会第60回大会発表論文集 立教大学 S84 及び配付資料
- Rotter, J. P. 1966 Generalized expectancy for internal vs external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1- 28.
- ・セリグマン、マーティン (著) 斎藤茂太 (監修) 山村宣子 (訳) 1990/ 1991 『オプティミストはなぜ成功するか』 講談社
- ・Stipek, D. J. 1988/ 1990 Motivation to learn: For theory and practice. Prentice Hall (D. J. スティベック (著) 佐久間徹 (監訳) 1990 『「やる気」をうみだす行動学子どものモチベーション』 二弊社)
- ・杉山憲司 1997 脱モチベーションと競争回避の研究 日本教育心理学会第39回総会発表論文集
- ・杉山憲司 1998 脱モチベーションと競争回避の研究 (その2) 日本教育心理学会第40回総会発表論文集
- ・スナイダー、マーク (著) 斎藤勇 (監訳) 1986/ 1998 『カメレオン人間の性格ーセルフ・モニタリングの心理学ー』 川島書店
- ・Tobias, S. 1985 Test anxiety: Interference skills and cognitive capacity. *Educational Psychology*, 20, 135- 142.
- ・Wentzel, K. R.1997 Student motivation in middle school: The role of perceived pedagogical caring. *Journal of Educational Psychology*, 89, 411- 419.
- ・Seligman & Maier, 1967 Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental psychology*, 74, 1-9.

[Abstract]

A Study of Learning Motivation and Obstruction Conditions: An Analysis of Negative Motivation and Coping Behavior on the Basis of an Interaction Model with Personal Traits and Situational Factors

Kenji SUGIYAMA

The purposes of present study is to inspect existence of negative motivation which is different from learned helplessness and to clarify personal traits and situational factors related to negative motivation. For these purposes, we made three studies. The pilot study with 40 university students investigated in a free-answer method into unconcern, apathy and so on. The first study with 110 university students consisted of the negative motivation scale comprising of 20 items, a self-esteem scale and personality traits. The second study with 148 junior high students, high school students 333, university students 148 consisted of the negative motivation scale (revised edition), three personal traits, and two situational factors. The personal traits consist of a self-esteem scale, personality traits and Seligman's Learned Optimism Scale. The situational factors made an important relational experience scale (5 items) and a person-environment interaction scale (6 items) newly.

In pilot study, the 7 reasons to fall in the negative motivation was pointed out; 1) existence of a failure, lack of efficacy expectancy (a learned helplessness), 2) anxiety for the future (lack of achievement goals), 3) sensitivity want or a spread of daily negative feelings, 4) mind and body fatigue (overwork), 5) compulsion and existence of an obstacle, 6) doubt for established value, 7) doubt for self-value on the basis of social comparison, and etc.

In study 1, as a result of factor analysis (principal component analysis, six factor varimax rotation), six following factors were recognized; 1) lack of efficacy expectancy (learned helplessness), 2) competition avoidance, 3) act interruption by self distrust, 4) feeling of external control, 5) doubt for established values, and 6) negative mood.

In study 2, as the results of factor analysis (principal component analysis, six factor promax rotation) and multiple regression analysis, we've concluded. 1) The act interruption by negative moods was in connection with fall of self-esteem in the high school and junior high school student, and the high school student and the university student were related with neuroticism, 2) competition avoidance which comes from

passiveness was related with a lack of a viewpoint to interact, 3) feeling of external control of reinforcement was not related with temperament, 4) act interruption to come from a failure avoidance was not accompanied with a fall of a self-esteem, and it is a characteristic that connection with a situation factor is not recognized as well, and 5) because α coefficient was low, conclusion of 5 factor were refrained from. From the above-mentioned result, the diversity of negative motivation and development change were considered.